

# 冬 物 語

八  
神  
大  
輔

## 冬物語 〔春〕

ドアを開ける前から、悪い予感があった。

外は、激しい雨が降り続けている。このままいつまでも晴れることはないのではないか、そんな風に考えてしまうほど、真っ黒な雲が空を覆っていた。

なんとはない肌寒さに、かすかに身を震わせたとき、玄関のベルが鳴った。

すでに夜更けといえる時間だったが、家にはほかに誰もいない。胸騒ぎを抱えながら、彼女は玄関に出て、ドアを開けた。

そこには、雨に打たれるまま立ち尽くす、一人の少年がいた。

少年はうつむいていて、表情を見ることはできなかったが、それが誰か、彼女にはすぐわかった。わからないはず、なかった。

「……！ どうしたの、こんな時間に、そんな格好で……!?」

少年は答えない。ただ彫像のように、雨の中、佇むだけだった。

「……とにかく、中に入って。風邪引くわよ、もう」

自分もまた雨に濡れることなど厭わず、彼女は少年が立つ門まで小走りに出た。

家に入れようと、彼女が少年の腕を掴む。その瞬間、少年はびくっと全身を振るわせて、彼女の腕を振り払った。そして、驚く彼女に、怯えるような視線を向けた。

彼女は、その少年の視線をまっすぐ受け止めた。

降り続く雨が、彼女の長く艶やかな黒髪を、頬に張り付かせる。彼女は手でその髪をかき分けつつ、ゆっくりと微笑

んだ。

「……！」

気がつくと、彼女は少年に抱きしめられていた。いや、少年が彼女の胸にすがりついていた、と云うほうが正しかったかもしれない。少年は彼女の腕の中で、泣きじゃくっていた。

「真冬……俺は……俺は……！」

彼女 藤村真冬は、少年を抱きしめる力を強め、暖めるように何度も何度もその体をさすった。そして、何度も何度も繰り返して、呼びかけ続けた。

「どうしたの？ 何があったの……？ 信……」

\*

……最悪の目覚めだった。

真冬は知らず知らず流していた涙をぬぐいつつ、上体を起こした。全身をじっとり濡らした寝汗が気持ち悪い。シャワーを浴びなければ、とぼんやり考えながら、深いため息をついた。

(また……あのときの夢……)

何度同じ夢を見ただろう。あれからもう、三年近く経つというのに。

重い体を引きずるようにして、真冬はバスルームに入った。火傷しそうなほど熱いシャワーを浴びていると、少しずつ頭がはつきりしてきた。

バスルームを出て、鏡の前で髪を乾かす。長くボリュームのある髪の手入れは、なかなか時間を食うものだった。

何度、切ってしまうおうと思ったかしかない。だけど、どうしてもできなかった、その理由は……。

堂々巡りに陥りそうになる思考を振り切るため、真冬は大きくかぶりを振った。

「慣れないものね、いつまで経っても」

鏡の中の自分にきつい眼差しを向けて、そう呟く。

そのあとはいつもどおりの朝だった。リビングに向かい、トーストを焼いて、珈琲を入れる。食卓には真冬一人だったが、それもいつものことだ。食後は再び洗面所に戻って歯を磨き、自室で制服に着替える。シャワーのせいでいつもより準備に時間はかかったが、相当早く目覚めてしまったため、家を出た時刻は普段とほとんど変わらなかった。

外は、曇一つない快晴だった。

あの日の雨は、二度とやまないかと思ったのに。

真冬はまた一つ、ため息をついてしまう。

さわやかな天気とは裏腹に、重く沈んだ心を抱えたまま、

真冬は通学路を辿り始めた。

「真冬先輩、こんなところにいたんですか」

「ん……ああ、鷹乃……」

屋上のベンチに腰掛けて、ぼんやりと空を眺めていた真冬は、後ろから声をかけてきた少女を振り向いた。

長い黒髪を、ポニーテールにしている。その綺麗な黒髪や、やや切れ長の瞳、そして何より雰囲気、真冬によく似ていた。姉妹に間違われることもしばしばだ。実際、二人は姉妹のように仲がよかったが。

真冬の一年後輩、現在は浜咲学園の二年生である寿々奈鷹乃だった。

「昼休み、もう終わりですよ」

鷹乃がそう云い終わらない内に、予鈴が聞こえてきた。ほら、と鷹乃は促したが、真冬は立ち上がろうとしなかった。

「今日はもう、いいわ。そんな気分じゃない」

最初から休めばよかった、と真冬は後悔していた。教室にいたところで、何も手につかない。繰り返ばかりが浮かんでく

る、そんな自分がうつつとしかかった。もっとも、家にいても同じことを考えて、こんなことなら学校に行ったほうがよかった、と云っていたかもしれないけれど。

鷹乃は真冬の言葉に、一瞬、眉をひそめたが、すぐに微笑んで真冬の隣に腰を下ろした。

「じゃあ、おつきあいます」

「ダメよ。あんたは私と違って優等生なんだから」

そう云って、真冬は、ニツ、と唇の端だけで笑った。猫のような印象を与える、その笑み。それになぜか鷹乃は安堵を覚えた。

「入学以来、ずっと主席の人が云つと、嫌みですよ？」

「だからこそ、鼻持ちならないんですよ」

うつつとうしげに長い髪をかき上げながら、真冬は他人事のように云った。

確かに真冬は教師受けするタイプではない。だが、そんなことは真冬も鷹乃も、気にしたことさえなかった。

「それに、もう間に合いません」

五時間目の開始を告げるベルが鳴った。真冬は苦笑するだけ何も云わず、また空に視線を戻した。

鷹乃はそんな真冬の横顔を、じっと見つめた。言葉を紡ぎ出すきっかけを一所懸命探す、なかなか見つけられず、沈黙が流れた。

「……どうかしたの？」

結局、会話の糸口を作ったのは、真冬のほうからだった。空のどこかを見つめたまま、独り言のように、真冬は呟いた。

鷹乃は何度かためらいを繰り返しながら、真冬に答えた。

「それは……私が聞きたいことです」

「どういうこと？」

「どうって……」

「……」

「何か、あったんじゃないんですか？ 元氣ないです、真冬先輩……」

鷹乃の言葉に、真冬は小さく微笑んだ。  
真冬がそんな風に笑ったとき、なんと答えるか、鷹乃には  
わかりきっていた。

「大丈夫。ちよっと夢見が悪かっただけよ」

「夢……」

そうですか、いつもなら鷹乃は頷くしかなかった。真冬  
は心の翳りを覗かせることは滅多になかったし、あったとして  
も、それは本当に一瞬のことだった。どれだけ親しくなろう  
と、痛みを人に見せようとしない。それは心を閉ざしている  
わけではなく、生き方の問題だろうと鷹乃は思っていた。自  
分も、そうありたいと。

けれど、今日の真冬は違っていた。いつもと同じように凜  
とした佇まいを見せているけど、どこか痛々しいものがある  
て、鷹乃は口を閉ざすことができなかった。

「また……あのひとのこと……ですか？」

「……ん……」

否定とも肯定ともつかない、曖昧な返事。それこそが、肯  
定の何よりの証だった。

そうわかったから、鷹乃は思わず語気を強めて言い募って  
いた。

「もう、忘れたほうがいいです」

「……」

「真冬先輩が、そんな風に過去に縛られている必要はない  
はずです……そんなの……私は……嫌です」

「……そうね」

真冬はやはり、鷹乃を見ようとしめない。ただ空を見つめた  
まま、言葉が続けた。

「きっと、鷹乃の云うとおりだと思う」

「……」

「……雨がね、降ってたんだ」

「……え？」

「いつもいつも……雨が降ってた……。そんな気がする……」

\*

天気予報どおり、その日は午後から雨になった。

体育館での練習を終え、陸上部の部室の鍵を閉めて、真冬  
は雨空を見上げた。

部員はすでに皆、帰らせている。全員が帰ったのを見届け、  
戸締まりを自分で確認するのは、部長としての務めというよ  
り、真冬の性格だった。

職員室に鍵を戻したあと、真冬は折り畳み傘を広げて、  
外へ出た。グラウンドに足跡を残さないよう 雨の日に荒  
らすと、あとの手入れが大変だ 校庭の隅を遠回りして  
歩き、一人、母校である中学の校門を抜けた。

季節は、春。わずかに残っていた桜が、雨で散らされてい  
く。その様子を惜しそうに眺めながら、真冬は歩いていく。

ふと、いつも通る公園の前で、真冬は足を止めた。

この公園で、よく猫を見かけた。人に慣れているようで、  
近づいても逃げない。真冬もミルクや食べ物あげたことが  
あった。

こんな雨の中、どうしているだろう。雨をしのぐ場所はあ  
るだろうか。

そう考えて、真冬は公園の中に足を踏み入れた。

きよろきよろと周りを見回す。こんな天気だから、そこに  
は誰もいない。ただ一つの傘だけが転がって……。

「……え？」

違う。誰かが傘を差したまま、地面にしゃがみ込んでいる  
のだ。

真冬は傘の中が見える位置まで、近づいていった。

そこには、少年と猫がいた。人懐こい笑顔を浮かべた少年  
が、猫にパンを与えている。よく見ると、少年は猫が濡れない  
よう傘をさしかけていて、自分自身の背中が濡れそぼってい  
た。

真冬がすぐそばに立っても、猫はお構いなしに食事を続けていた。少年が気づいて、顔を上げる。そして、笑った。

「あ、藤村先輩、こんにちは」

「……こんにちは、稲穂くん」

そう、真冬はその少年を知っていた。陸上部の後輩だったからだ。中学二年生の、稲穂信だった。

同じ部だと云っても、男子と女子では練習も別だし、交流はあまりない。特に真冬は男にあまり興味がなかったので、なおさらだった。だから、真冬は信とは話をしたことはあるだろうけれど、どんな人間なのか、ほとんど知らなかった。それは信も同じだっただろう。

「どうしたんですか、こんなところで？」

屈託なく、信が笑顔で訊いてくる。真冬は「その猫が心配だった」と正直に云うのが気恥ずかしく、逆に質問で答えた。

「稲穂くんこそ、何してるの？」

「俺？俺は見たとおりですよ。こいつが雨に濡れて寒そうで、腹も減らしてるみたいだったから」

「……」

なんのてらいもなくそう言葉にできる信が、少し真冬にはうらやましかった。

自分には、少し構えて人と接することしかできないから。そんな真冬のわずかな憂いに、信は当然気づくはずもなく、ひたすらパンをむさぼり食う猫に視線を戻した。

「しっかし、相変わらずよく食うなあ、お前は」

「……よく、ご飯あげてるんだ？」

「そうですね、帰り道だから、なんとなく」

「猫、好きなの？」

「好きですよ。藤村先輩もそうでしょ？」

再び顔を上げて、信は真冬を見た。その笑顔を、なぜか真冬はまっすぐ見られなかった。

「え……なんで？」

「なんとなく。先輩、猫っばいし」

「……なによ、それ」

真冬は、かろうじて苦笑して見せた。

同じようなことは、これまでにも云われたことがあった。だけど、それはあまりいい意味で使われたことはなかったように思う。特にそのきつい、挑むような眼差しが。

しかし、信は変わらず、笑顔だった。

「可愛いつてことですよ」

「な……」

思わず真冬は絶句した。かすかに赤面していたかもしれない。

誰かに見られたら、一頻り話題になるだろうその動揺ぶりを、真冬は即座に押さえた。眉をひそめて、咎めるような視線を信に向ける。

「生意気ね」

「すみません」

信にはやはり屈託がない。真冬はため息で、つい浮かんだ微笑みを隠した。

いつの間にか猫は食事を追え、顔を洗っている。信が手を伸ばして喉を撫でると、ごろごろと気持ちよさそうに鳴らした。

「……さて、それじゃ、俺は帰るぞー。またな」

そう云って、信は傘を猫の上に置いたまま、立ち上がった。未だやまない雨が、信の体を打っていく。

「じゃあ、失礼します。お疲れさまでした！」

最後だけ体育会系の挨拶をして、信は駆け出そうとした。猫が濡れないよう、傘を残して走って帰ろうとするその背に、真冬は声をかけずにはいられなかった。

「あ……ちょっと、待って」

「え？」

振り向いた信に、小走りに近づくと、真冬は傘をさしかけた。目を丸くして見つめる信から、目をそらす。

「送ってあげるわ。風邪引かれると、部長として困るから」

照れ隠しのため、ぶっきらぼうな口調になる。その真意に気づいているのかどうか、信は破顔して、真冬の傘を取った。「ラッキー。ありがとうございます。あ、傘は俺が持ちますから」

「あ……うん」

それからは言葉少なに、雨の中、二人は肩を寄せ合って帰った。

別れ際、やはり信は真冬が濡れないように気を遣っていたことを、真冬は彼の濡れた肩で悟った。

それから、真冬と信は、なんとなくその公園で会う機会が増えた。

特に待ち合わせをするわけでもなければ、部活のあと、約束して一緒に出るわけでもない。ただいつもどおり真冬が部室を締めて学校を出て、公園に差し掛かると、信が猫と遊んでいる。その姿を見て真冬も公園に入り、一緒に猫を構って、公園の前で別れる。

そんな日常を、いつの間にか真冬は楽しみにしていた。

「じゃあ、またな」

信が猫にそう云って、立ち上がる。猫は軽くなやあ、と答えて、歩き去る二人を見送っていた。

信は公園の出入り口で振り返り、苦笑を浮かべた。

「結構ドライな奴ですよ。絶対ついてきやしない」

「……野良としての、ぎりぎりのプライドかしら？」

「あれだけ食って、プライドもないもんだ」

信の笑みにつられて、真冬も笑顔を浮かべる。

その笑顔を少し眩しそうに見ていた信は、猫を振り返った真冬の表情がふと暗くなったことに気づいた。

「……藤村先輩？」

「……怖いのかも、しれないわね」

「怖いって？」

「信じることが」

その優しさを信じて手を伸ばして、本当にいいのだろうか。憐れみなら、いくらでも与えられる。

だけど、手放しの信頼に応えるのは、誰にでもできることじゃない。

重荷だと思われれば、手を振り払われるかもしれない。

だから、怖い。

「……」

信は束の間、言葉を失って、真冬の横顔を見つめた。だがすぐに、いつもの人懐こい笑顔を浮かべた。

「あの猫が、そんなことまで考えてるはずないですよ」

「……そうね」

真冬も苦笑して、信を見上げた。信は微笑んだままだった。

その笑顔にほっとさせられると同時に、真冬は、自分でも説明できない胸騒ぎを覚えていた。

そう、怖いから。

「じゃあね、また明日」

「はい、お疲れさまです」

笑顔で手を振って、信は少し駆け足で去っていった。

真冬はその背を見送りながら、軽いため息をつく。

それが日常。あの雨の日から始まった日常。

そして、その日常が崩れるのも、やはり、雨の日だった。

その日、真冬は下校するのがいつもより遅くなった。夏の大会について、顧問と打ち合わせがあったからだ。

さらに悪いことに、夕方から急に雨が降り始めていた。折り畳みを置いてあったおかげで、雨に打たれる心配はなかったが、どんよりと曇った空を憂鬱げに真冬は見上げた。



けれど、やはり真冬はいつもと同じく、静かに微笑むだけだった。

「だから……鷹乃の云うとおりだと思っ」

「真冬先輩……」

「だけど……だけどね。あの雨の日の涙を、忘れることなんてできない」

「……」

「できないのよ……」

そう繰り返したとき、初めて、真冬の頬を涙が流れた。一雫だけ。

鷹乃は耐えられず、強く目を閉じて面をそらした。

真冬はただ空を見つめていた。あの日のことが夢のように思える、蒼く澄んだ空を。



## 冬物語 〔夏〕

白い部屋だった。

壁も、床も、天井も、カーテンも、すべてが白い。

くすんだ白は灰色がかった印象を与え、むしろ沈鬱に思えるものだが、今、その部屋は暖かく穏やかな雰囲気満ちていた。それは、開放した窓から差し込む、初冬の柔らかい光のおかげだったのかもしれない。

その白い部屋に、同じく白いベッドがあった。白いシーツ、白い掛け布団。そこに上体を起こして座り、窓の外を眺めている、白い肌の女性。

彼女は実際には、もうじき四十に届こうという年齢である。だが、かすかに微笑んで青空を見つめているその横顔は、少女のような無垢さを湛え、とても年若く見えた。

この部屋の穏やかな空気は、やはりこの女性の存在故なのではないか。そんな風に思えるほど。

彼女はもう長いこと、飽きもせず冬の空を見上げている。その空が徐々に黄昏の青さに染まろうとする頃、ノックの音が響いた。

「……はい」

そこにドアがあったことをやっと思い出したように、彼女は面を向けた。そして、ドアを開けて入ってきた二人の黒髪の少女を認め、再び穏やかに微笑んだ。

「真冬……鷹乃ちゃんも、来てくれたのね。ありがとう」

その言葉に真冬はニツと笑みを返し、鷹乃は深々とお辞儀をした。

「こんにちは。お久しぶりです」

「うん」

「お母さん、起きてたのね。大丈夫？」

云いながら、真冬は彼女のそばに近づいた。

そう、その女性の名は藤村千尋。真冬の母だった。

「平気よ。今日は天気もよくて、暖かったから」

「そう、よかった。……あ」

開放した窓に気づいて、慌てて真冬は駆け寄って窓を開めた。カーテンを引きながら、千尋を軽く睨む。

「だからって、こんな時間まで窓開けっぱなしにしてちゃダメじゃない。体が冷えたらどうするの」

「……だって、もうじき星が見えるのに」

「ダメです」

じろつと真冬に睨まれ、千尋は首をすくめつつも、頬を膨らませて見せた。

そんな子供っぽい仕草が、とても似合っている。真冬とどちらが親かわからない。そう考えて、鷹乃は思わずクスッと笑ってしまった。

「ほら、また鷹乃に笑われちゃったじゃない」

「あ……ごめんなさい」

「真冬の小言が多いからよねー、鷹乃ちゃん」

その言葉に、鷹乃はまた笑ってしまった。そうになる。だが、真冬のきつい視線を受けて、慌てて表情を強ばらせた。

「鷹乃もそう思ってるの？」

「い、いえ、とんでもないです」

「怖い先輩ねー」

「……もう、お母さんったら！」

怒った顔を作ろうとしたが、我慢できず、真冬も吹き出しってしまった。

白い部屋に、三人の女性の笑い声が響いた。

ここだけは冬を通り越して春が来たような、そんな暖かさに満ちていた。

鷹乃は今、出てきた建物を振り仰いだ。

冬の陽は短く、すでに辺りには夜の帳が落ちている。その間の中に屹立する白いビルは、何か不吉なものを思わせた。なぜだろう、あの部屋の白さは、とても暖かで穏やかだったのに。

「どうしたの、鷹乃」

「あ……いえ」

足を止めてしまった鷹乃に気づき、真冬が振り向いた。鷹乃の視線を辿り、同じように白いビルを見上げる。その瞳にふと翳りが差した。

「こういふ方はよくないけど……」

「……」

「病院の雰囲気って、好きにはなれないね」

「……はい」

二人が見上げているビルは、総合病院だった。

千尋はもうずっと長い間、そこに入院している。いつからなのか、真冬でさえすぐには答えられないほど。

生まれたときから母と二人きりで暮らしていた。そして、自分で覚悟していたよりずっと早く、一人きりで暮らすことになった。

そんな過去を思い出しているのか、わずかに唇を噛みしめる真冬の横顔に、鷹乃はそっと視線を向けた。

「お母様は……その……まだ……」

「……うん」

ため息混じりに、真冬は頷いた。そのまま踵を返して歩き出す真冬のを、鷹乃は追った。

「最近、だいぶ調子いいみたいだけど……それでも、油断できないから……」

歩きながら、淡々と真冬は呟いた。

鷹乃もまた暗い面持ちでうつむいていたが、そんな気持ち振り切るように、無理矢理弾んだ声を出した。

「でも、ほんと、素敵なお母様ですよな」

「……そう？」

苦笑を浮かべて、真冬は首を傾げた。鷹乃の気遣いがありがたく思いつつ、いつもの調子を取り戻した。

「いい年して、いつまでも子供みたいなんだから」

「そこがいいんじゃないですか。お母様の笑顔は、見ているだけでこっちまで幸せになれるみたいで……本当に素敵です」

「……そう、だね」

ぼつりと呟いて、真冬は足を止めた。

鷹乃が怪訝そうに振り返ると、真冬は小さく微笑んでいた。

その笑みはどこか切なく悲しげで、そして、どこか千尋の微笑に似ていた。

「真冬先輩……？」

「母がどうしてあんな風に笑えるのか……、私には、ずっとわからなかった。だけど、今なら……少しだけわかる気がする」

「……」

「え……？」

「……」

\*

夏が近づいていた。

練習を終えても陽は高く、明るい。まだ今は夕方になると涼しいが、もうじきむせかえる熱気に満たされるようになるだろう。

真冬は軽く目を細めて、澄んだ青空を見上げた。

「部長、お先に失礼しまーす」

「あ……、うん、お疲れさま」

真冬の横を、部員たちが挨拶をしながら通り過ぎていく。その中にある少年を見つけて、真冬は誰にもわからないほどわずかに、頬を強ばらせた。

少年もまたその視線に気づいた。だが、彼はなんの屈託も

ない様子で、真冬に笑顔を向けた。

「お先です、藤村先輩」

「……お疲れさま、稲穂くん」

信は軽く頭を下げて、友達と談笑しながら帰っていった。

その後ろ姿が見えなくなっただけから、真冬は初めて軽くため息をついた。

「……バカみたい、私」

呟いて、部室の鍵を閉める。そのままうつむき加減で、真冬は歩き出した。

……あの雨の日。

冷たくなつた猫を抱いて立ち尽くす信を、思わず真冬は抱きしめていた。そうしなければ、彼の心さえも、崩れていくように思えた。

けれど、そのあと。信は真冬が拍子抜けするほど、何も変わらなかった。さすがに翌日は照れ臭そうに頭を下げたものの、あとはやはりいつもどおり笑い、いつもどおり生活していた。

特に真冬を避けるわけでも、逆に馴れ馴れしくしてくるわけでもない。部活の先輩と後輩として、ごく普通の態度をとり続けていた。

「当たり前よね……先輩と後輩だもの」

もうやめよう、と真冬は考えた。心配するほどのことではなかった、それだけだ。何となく胸がもやもやするのは、あれだけ大騒ぎして、すぐにケロッとしているのが癪に障るだけ。そう、それだけ。

真冬は校門をくぐり、家路を辿り始めた。だが、無意識に選びかけた道筋ではと足を止め、踵を返した。

そう、ひとつだけ変わったことがあった。

真冬の通学路。

あの事故の現場を通るのがつらくて、真冬は遠回りして学舎へ通っていた。

公園に行く理由もない。信との接点も……すでにない。

自分でも気づかない内に、真冬は再度ため息をついていた。

そしてまた、雨の日がやってくる。

練習が終わるまではかるうじてもっていたが、真冬が部室の鍵を閉める頃には、空を埋め尽くす暗雲から、ぼつぼつと雨の滴がこぼれ始めた。

「また……雨、か」

真冬は教室へ置き傘を取りに戻った。あの日と同じ白い折り畳み傘。それを取って出てきたときには、雨はもう本降りになっていた。

傘を差した真冬はいつものように遠回りしようとして、ふと、足を止めた。

あの公園に行ってみよう。突然、そんな考えが浮かんだ。あの日と同じ雨の中、もう誰もいない公園をその目で確認すれば、もう終わったことだと気持ちを整理できるかもしれない。私ひとりがいままでどこだわっているのは嫌だ。

硬い表情で、真冬は公園へ向かった。

十分足らずで、目的の場所へは到着してしまう。

真冬は傘で顔を隠すようにしながら、おずおずと公園の中を覗き込んだ。

公園には、やはり誰もいない。そのはずだった。なのに。

「……うそ」

刹那、真冬は目を見開き、息を飲んだ。

公園の真ん中にある、大きな樹。その陰で雨宿りをしながら佇んでいる少年が、いた。

いつも屈託のない笑みが浮かんでいる表情には、今はほんの少し憂いがあった。

視線は、まっすぐ一脚のベンチに向けられている。少年と真冬と、あの猫との約束の場所だったベンチに。

真冬は声をかけることも、公園の中に入ることさえでき

ず、ただそこに立ち尽くして少年を見つめていた。

やがて、少年は軽くため息をつき、立ち去ろうと公園の入口を振り向いた。そして、そこに立つ白い傘と、その下の黒い髪に気づき、先ほどの真冬と同じように目を丸くした。

「……藤村先輩」

真冬は、答えられない。どんな表情をすればいいのかも、わからなかった。ただじっと、少年 信の目を見つめ返した。

それに対して信は、やはり、いつもの笑顔だった。

「どうしたんですか、こんなところで？」

初めてここで会ったときと同じ台詞を、同じ笑顔で、信は云う。

そのことが嬉しいのか腹立たしいのか、それも真冬にはわからなかった。ただその言葉で、笑顔で呪縛が解けたように、ゆっくり公園の中に踏み込み、信の前に立った。

「稲穂くんこそ。何してるの？」

真冬も、あのときと同じ台詞で答えた。

そのことに気づいているのか、信は言葉を返さず、ふと目をそらして、またあのベンチを見つめた。

真冬もそのベンチを一瞥し、そしてすぐ信の横顔に視線を戻した。

信は小さく微笑んでいる。けれど、それは真冬が見知った屈託のない笑顔とは、違っていた。

真冬は、さっきまでここにひとり立っていたときの信の様子を思い出した。

「……まだ、自分を責めてるの？」

「え……」

真冬の言葉に、信が振り向いた。

真冬は信の瞳を、まっすぐに見つめた。

あのあとも、ずっとこのひとはここに来ていたのだろうか。ただひとりここに佇み、自分を責め続けていたのか。

その想像は、真冬の胸を貫く痛みとなった。

しかし、信は。微笑んで、首を横に振った。

いつもと同じ、屈託のない笑顔で。

「そんなんじゃないですよ」

「……」

「ちょっと、思い出してただけです」

「……そう」

私は、忘れようとしたのに。なかったこと、終わったことにしようとしたのに。

このひとは、覚えていようとするんだ。痛みも、罪の記憶も抱いて。

「……それと、もうひとつ」

「え？」

物思いに沈みかけた真冬は、はっと我に返って信を見上げた。

信はすこしはにかんだ様子で、けれど、真剣な色を瞳に映して、真冬を見つめていた。

「ここにいれば、藤村先輩に逢えるような気がして」

「稲穂くん……」

「偶然かもしれないけど、来てくれて、嬉しいっす」

頭をかきながら、信が破顔する。

その笑顔。あの日の涙。

そう、このひとはあまりに。

「……私は、猫の代わりじゃないわよ」

ニツ、と、真冬は唇の端だけで笑って見せた。言葉とは裏腹に、猫のような印象を与えてしまう微笑。

「い、いや、そういうんじゃないよ……」

慌てて信は言い訳をしようとする。

真冬は手を伸ばして信の胸倉を掴んだ。

「せ、先輩？」

狼狽する信を無視し、真冬はそのまま信の体を引き寄せ

る。そして、強引に、唇を重ねた。

心底驚いて、信は目を大きく見開いた。だが、それも一瞬のこと、信もまた目を閉じると、真冬を強く抱きしめた。真冬の手から、傘が落ちる。白い傘が、雨を弾きながらぐるぐると回った。

信の腕の中で熱い口づけを交わしながら、薄目を開けて、真冬はそつと信を盗み見た。  
そう、このひとはあまりにも。

冬物語  
（秋）

1

気がつけば秋もだいぶ深まり、夕暮れ時ともなると、吹く風に肌寒さを覚えるようになっていた。

だが、その程度の気候のほうが、スポーツをするには心地よい。今日もグラウンドでは陸上部を始め、様々な運動部が練習をしている。

真冬は教室の窓辺の席に座り、ぼんやりとその光景を眺めていた。

三年生である真冬は、夏の大会で陸上部を引退した。

つい最近まで自分もあの中で汗を流していたのに、と思うと、ふと淋しくなる。そんな感傷に、真冬は囚われているわけではなかった。

真冬は、一人の少年を目で追っていた。

年下の恋人。

そう、恋人……と云っていいのだと思う。だけど、何度自分でそう考えても、なにかくすぐったいような違和感があった。つい苦笑してしまうのだった。

教室にはもう誰もいない。高校受験を控え、級友たちは皆、この時間は、塾か、図書館か、自宅で勉強しているだろう。

真冬はただ一人、午後の日だまりの中、飽きもせず練習する陸上部を眺めていた。それは本人は認めたがらないにしても、日向ぼっこをしている猫のようであった。

と、そのとき。教室のドアが、静かに開いた。真冬は軽く首をひねってドアのほうに視線を向け、眼鏡をかけたショートヘアの女の子が入ってくるのを見た。

少女は真冬を見つけて、驚きに目を丸くした。

「……藤村さん？ まだいたんだ」

「ええ。ちよっとね」

軽く答えただけで、真冬はまた校庭に視線を戻した。

その少女の名は、新堂環といった。真冬のクラスメイトだが、特に親しいというわけではない。特に仲が悪いわけでもないが。

真冬の交際範囲は決して広くない。さらに、「同じクラスだから仲良くしよう」と考えるほど、人当たりがよくもない。

だから、真冬には環と会話を楽しむという発想はなかった。

だが、環のほうは少し違う意図を持っていたようだ。彼女はそのまま窓際まで歩いてきて、真冬の側に立った。

「……？」

真冬が不審そうに首を傾げて、環を見上げる。環はどこか掴み所のない笑みを浮かべていた。

「何してたの？」

「……別に」

「ふうん」

云いながら、環は窓から校庭を見下ろした。まるで、何を見ていたか知っている、と云わんばかりに。真冬はほんの少し眉をひそめたが、何も云わなかった。

「さすが、余裕だね。みんな受験で頭いっぱいだったのに」

「……そんなんじゃないけど」

「藤村さんはどこ受けるの？」

「……浜咲。近いから」

「近いつて理由だけで、あんな進学校を選べちゃう辺りが、やっぱり余裕なのよねえ」

芝居がかった仕草で、環は肩をすくめて見せた。

真冬は今度ははっきりわかるほど眉をひそめ、不機嫌に視線を逸らした。

もともと面差しのキツイ真冬は、そんな表情をすると、な

かなかおっかない印象を与える。

しかし、環はまったく動じた風もなく、相変わらず薄く微笑んだままだった。

「あのさ、訊いていい？ 藤村さんって、さ」

「……なに？」

不機嫌さが露骨に声に表れていた。それでも環は、屈託なく笑っていた。

その屈託のなさ、信のそれとは正反対に、真冬を落ち着かない気分にさせた。

「陸上部の後輩の男の子とつきあってるって、ホント？」

「……それが？」

「へ、ほんとなんだ。びっくり。藤村さんが年下趣味だなんて」

「年下だからとか、そういうのは関係ないでしょう」

それまで環の顔を見ずに答えていた真冬だったが、思わずキツと顔を上げて、環を睨んだ。

そのきつい視線を受けて、けれどやはり、環は微笑んでいた。

「そこでようやく真冬は、戸惑いを覚えた。」

「このひとはいったい、なんなんだろう？」

「そっかー、そうだよ。恋しちゃったら、年なんか関係ないよね」

「……恋」

その言葉に、真冬は不意をつかれた想いがした。

自分自身、感じていた違和感。人から云われると、それがいつそう強くなる。

恋、というのだろうか。この気持ちは。

信のことを、放っておけないと思った。そばにいてあげたい

……そう思った。

「……」

「……」

しかし、真冬はそのことに気づくことができず、苦笑を浮かべて軽く首を振るだけだった。

「そう……ね。ええ、そうなんだと思う」

「……」

「なんか危なっかしくて、ほっとけないのよね。だから、私らしくないことはかりしてしまっただわ、きっと」

「そう。私らしくない。こんな風に、誰かに激しく心を揺さぶられることは。」

「恋人」という言葉に、喜びより、戸惑いを感じてしまう私には。

しかし。

「らしくない……か。そう、思い込んでるだけなんじゃないの？」

「え……？」

「それが、本当のあなたなのかも知れないじゃない？ 彼には、そういう不思議な力があるわ。相手を無防備なほど素直にさせてしまう。……ちょっと怖いぐらいに、ね」

「新堂さん……？」

「思わず、真冬は立ち上がっていた。」

「このひとは、信のことを知っている！」

「どうして……」

「じゃあ、あたし、帰るから。またね」

真冬は言葉の通り、環は満面の笑顔でそう云った。すぐに身を翻して、ドアに向かう。去り際に振り返り、ばいばいと真冬に手を振って見せた。

真冬は引き留めることもできず茫然と見送っていたが、ほう、と大きなため息をついて、椅子に座り直した。

そのとき、真冬はやっと気づいた。ずっと感じていた居心地の悪さの理由を。

彼女は 環は。最初から最後まで、笑顔を浮かべていたけれど。

どれぐらいの時間、茫然とそこに座っていたのだろうか。再びドアを開ける音が響いて、真冬はびくっと体を震わせて振り向いた。

「あ、ここにいたんだ。探したよ、先輩」

「……稲穂くん」

その名と同時に、真冬は深い安堵の吐息をついた。文字通り脱力し、思わず机に肘をついてしまう。

教室に入ってきた信は、真冬のそんな様子には気づかず、ただいつもどおりにこやかな笑顔だった。

「練習、終わったよ。帰ろ」

「……あ、もう、そんな時間だったんだ」

慌てて立ち上がりながら、真冬は窓の外を見た。云われたとおり、夕闇が迫り、グラウンドにはもう誰もいない。

「いつも終わる頃に降りてきてくれるのに、いないからさ。帰っちゃったかと思ったよ」

「ごめん。考え事してて……気づかなかった」

「考え事？」

「ん……」

瞬間、真冬は迷った。環のことを話すべきかどうか。

目の前で、不思議そうに首を傾げている少年に、やましい隠し事があるなんて、まったく思えなかったけれど。

「行く。……歩きながら、話す」

「オッケー」

何がそんなに嬉しいのか、真冬の言葉に対して、信はいちいち顔中を笑顔にして答える。真冬は苦笑しつつも、環の言葉を思い出していた。

(無防備なほど素直にさせる……怖いぐらい)

「ん、なに？ なんかついてる？」

じっと自分の顔を見つめられ、信は慌てて手で顔を拭いた。

顔は洗ってきたんだけど……と云う信に、もう一度苦笑しながら、真冬は歩き出した。

「なんでもない。さ、早く帰ろ」

「あ、ちよっと待ってよ、先輩！」

\*

「環姉さん？」

「ねえさん？」

二人はほぼ同時に驚きの声を上げ、互いに目を丸くして見つめ合った。

信はやや表情を曇らせて、目をそらす。真冬はすっと瞳を細めて、信の視線を追った。

「そっか。先輩と同じクラスだったんだ……」

「ねえさんって……どういうこと？」

「あ、うん、昔そう呼んでたから、つい……」

照れくさそうに、信は頭をかいた。夕日に赤く染まるその横顔に、真冬はまだ少しきつめの視線を送っていた。

帰り道。真冬が部活を引退してからも、さっき信が云ったように、練習が終わるまで真冬が待っていて、一緒に帰ることになっていた。特にどちらかがそうしようと云ったわけでもなく、約束をしていたわけでもなかったが。あの公園で、約束もなしに互いを待っていたあの頃と同じように。

「知り合い、なんだ、やっぱり」

「うん。……家が、近所だね。ガキの頃は、遊んでもらったりしたよ。そんなときの癖だな」

「幼馴染みってことか」

「そんないいもんじゃないよ。ほんと、ちっちゃい頃だけだしさ、一緒に遊んだのなんて。同じ学校だったことも、忘れてたよ」

「……でも、そういう小さい頃の絆ほど、大切なものなんじゃないの？」

「……」

「……でも、そういう小さい頃の絆ほど、大切なものなんじゃないの？」



「だから、違っって……」  
 困ったように、信は顔をしかめた。だが、ふと何かに気づいた様子で、嬉しげな笑顔を浮かべて真冬の顔を覗き込んだ。  
 「もしかして、先輩、妬いてる？」

「……」  
 こんなとき、赤面して言葉に詰まったりできれば、かわいげもあるんだろうけど。  
 真冬は信の言葉より、自分自身のそんな考え方に苦笑するしかなかった。

「そうね。そういうことにしておいてあげる」  
 「……ちえっ」

舌打ちしながら、それでも信は楽しそうに破顔した。その笑顔を見ていると、環との会話で生まれた胸のしこりが、自然と解けていく。それが真冬には不思議だった。

「でもほんと、環姉さんとは、最近全然つきあえないよ。……ていうか……もともと、苦手だったしな」  
 「……へえ？」

意外な言葉に、真冬は信を見上げた。信は珍しく、苦笑いに似た表情を作っていた。

「稲穂くんにも、苦手な人がいるんだ」  
 「どういう意味さ。……まあ、苦手っていうか……なんかちよっと、怖いんだよね」  
 「怖い……？」

真冬の瞳が、またすっと細くなった。何かを不審に思うときの、彼女の癖だった。

「うん……うまく云えないけど」  
 「……」

黙り込んでしまった真冬に対して、信は申し訳なさそうに笑顔を向けた。

「ごめん、変な話して」  
 「……ううん、なんとなくわかる……」  
 教室での環の様子を、真冬は思い出していた。

心の内を、決して覗かせないあの微笑。

彼女はいつたい何のつもりで、自分に声をかけたのか。そんなことを考えている内に、二人は真冬の家の前までやってきていた。

「それじゃ……先輩」  
 「あ、うん」

物思いに沈んでいた真冬は、信に声をかけられ、はっと顔を上げた。

信は名残惜しそうに、真冬を見つめている。

信が真冬を送って帰るのは日課のようになっていたが、未だ家へ上げてもらったことはなかった。そのことが不満でなかったはずはないが、信はいつも何も云わず、笑顔で手を振った。

「また明日」

「うん……あ、そうだ」

真冬もまたいつもどおり、軽く頷いて信に答えようとして、ふと明日の予定を思い出した。

「私、明日は用事があるから、先に帰るね。ごめん」  
 「そうなんだ。……用事って？」

「うん……母の……誕生日だから」

母という言葉が口にするとき、そこにほんの少し込められた憂い。それに信が気づくはずもなく、彼はただ笑顔のまま、話を続けた。

「へえ、お母さんの。親孝行なんだね、先輩」  
 「……」

「でも、先輩のお母さんなら、きっと美人なんだろうなあ。是非会ってみたいよ。あ、俺もお祝い持って参上するってのはどうかな？」  
 「……」

信にしてみれば、家に招待してもらえる口実になるかも、という淡い期待を込めた、軽い一言だった。

しかし、真冬は動きを止めた。文字通り、凍り付いていた

と云ってもいい。

そして、恐ろしく真剣な表情で、じっと信の顔を見ていた。その瞳の色に、信は狼狽した。

理由はわからない。けれど、なぜか真冬が泣き出しそうに思えて。

為す術のない信は、おどけてみせるしかできなかった。

「ごめんごめん、そういうときは、やっぱり、親子水入らずだよ。つまらないこと云って」

「……いいわよ」

「……え……？」

ただ一言、そう答えた真冬の真意がわからず、信は戸惑いを深めるばかりだった。

そして、真冬も。なぜそう答えたのかわからず、信は戸惑い、ただ茫然と、信の顔を見つめていた。

信は落ち着かない様子で、辺りをきよろきよろと見回していた。手には大きな花束を抱えている。

真冬は前だけを見たまま、まっすぐ歩いていった。もともと表情を変えることの少ない彼女だが、今日の面は仮面のように硬く、蒼白だった。

二人の前で、自動ドアが静かに開く。屋内に足を踏み入れながら、困惑顔で信は真冬を覗き込んだ。

「えっと……お母さんは、ここに……？」

「そうよ」  
そっけなく、信のほうを見ようともしないで答えた真冬は、顔見知りの看護婦に気づいて会釈をした。

真冬と信は、病院を訪れていた。

街の少し外れにある、規模の大きな総合病院だ。大病や怪我を煩ったことのない信には、これまで無縁の場所だった。

一緒に学校を出たあと、真冬は信に何も説明することなく、ただここへ連れてきたのだった。

広い病院の中を、真冬は迷いのない足取りで歩いていく。先ほどと同じように、時折、顔見知りの医師や看護婦に挨拶をしながら。

そのことは、彼女がここに通い慣れていることを示していた。

信ももうそれ以上言葉をかけられず、真冬のあとをついていく。

やがて真冬は、ある病室の前で足を止めた。

信は病室の名札に目を向けた。「藤村千尋」そう記されていた。

真冬がゆっくりと腕を上げ、ドアをノックする。少し間をおいて、静かな返事があった。

「はい。……どうぞ」

その声に、真冬の表情がふっと緩んだ。そこにいるのは自分の知らない真冬に思えて、信は驚いてその横顔を見つめた。

真冬はやはり信のほうを見ようとしないまま、病室のドアを開けた。そして、中に入ろうとしたところで、おずおずとあとに続こうとしていた信を振り返った。

「ちよっと待ってて」

「あ、う、うん」

後ろ手でドアを閉めながら、真冬は軽くため息をついた。信を連れてくることは、事前に母に知らせていなかった。

病床の女性の前に、いきなり見知らぬ人間を引き出すわけにはいかない。

それに、まだ。真冬は、自分がなぜこんなことをしているのか、わかっていなかった。

「……………どうしたの、真冬？」

静かな声に、真冬は顔を上げた。

ベッドで上体を起こして座っている母、藤村千尋は、いつものように穏やかに微笑んでいた。

その笑顔が子供の頃から大好きだったはずなのに、同じく子供の頃から、その笑顔を見ると泣きたくなるような気持ちに襲われた。

どうして、そんな風に。

「ううん、その、今日は人を連れてきたんだけど……………」

「まあ」

一瞬、千尋は驚いた表情になった。それは思いがけない喜びであったからこそなのだが、真冬はうつむいて唇を噛んだ。

「ごめんね、勝手なことして。嫌なら、帰ってもらおうから」

「何云ってるの。真冬がお友達を連れてくるなんて、珍しいじゃない。私も会いたいわ」

「……………」

真冬は無言で頷き、振り向いてドアを開けた。

促され、信が室内に入ってくる。その姿を見て、千尋はも

う一度、驚きで目を丸くした。男の子だとは思わなかったのだ。

「は、はじめまして。稲穂信、と申しますっ」

信は激しい勢いで、しかも深々とお辞儀をした。腕に持った花束がばさばさと揺れる。あれではせっかくの花が散ってしまうのでは、と真冬は眉をひそめた。

千尋は、微笑んで会釈を返した。

「はじめまして。真冬の母です。いつも娘がお世話になっていきます。こんな格好で、ごめんなさいね」

「い、いえっ、とんでもありませんっ」

声が完全に裏返っている。緊張でガチガチになったその姿に、真冬は頭を抱え、千尋は変わらず笑みを浮かべていた。

「真冬のクラスメイト？」

「……………ううん、部活の後輩」

「……………まあ」

三度、千尋は驚くことになった。年下の男の子とは。

真冬は怒ったように、面をそらす。わずかに赤くなった頬に、千尋は楽しげな視線を送った。

「あ……………あの、これ、どうぞ」

母子の微妙なやり取りに気づかず、緊張したままの信は、機械的な動作で花束を差し出した。

蘭を中心にした艶やかな花束だ。真冬のイメージから選んだが、千尋には百合などの清楚な花のほうが似合ったかも知れない。信はそう考えた。

しかし、千尋は心からの笑顔で、その花束を受け取った。

「ありがとう、素敵なお見舞い」

「いえっ」

「……………え？」

真冬と千尋は、同時に声をあげて、信のほうを見た。

信は赤面しながら、また深々と頭を下げた。

「お祝い、です！ お誕生日、おめでとうございます！」

「……………」

「……」  
短い、沈黙。

二人の女性は目を点にし、一人の少年は顔を赤くして頭を下げたままで。

その空気を破ったのは、真冬の苦笑だった。

「もう、先に云わないでよ。誕生日おめでとう、お母さん」

「あ……そっか……。忘れてたわ」

「やっぱり」

「うふ……ありがとう、二人とも」

「い……いえっ」

ようやく顔を上げた信は、じっと自分を見つめている千尋と眼があった。

千尋の瞳には、涙が浮かんでいた。

大切そうに花束を抱きしめて微笑むその姿は、あまりに美しく、儚かった。

その姿に、信よりも真冬のほうが、激しく動揺していた。そう、その笑顔はいつも、真冬を戸惑わせる。どうして、そんな風に笑えるのか、と。

「男の人から花を贈られるなんて、久しぶり。本当にありがとう、稲穂くん」

「とんでもないっ。俺なんかでよければ、毎日だって持ってきますよ！」

「ほんと？ 期待しちゃうわよ」

「え……えっと、毎日ってのは、言葉の綾で……」

信の緊張もやっとほぐれてきたようで、だんだんいつもの調子に戻っていた。真冬の動揺には、二人とも気づいてはいない。少なくとも、そう見えた。

真冬は誰にも聞こえないよう吐息を漏らし、談笑の輪に加わった。

「ほんと、調子いいんだから」

「あ、ひっどいなあ、先輩。俺はいつだって真剣だよ」

少し拗ねた口調で、けれど笑顔のままの信の言葉を、真冬は「ふうん」と軽く流してしまう。むくれる信と、喉を鳴らして笑う千尋。  
穏やかな空気の中で。真冬は心地よい安息と、拭いがたい孤独とを、同時に感じていた。

薄闇の中、真冬と信は、今日も真冬の家の前に立っていた。病院を出たあと、いつもどおり信が真冬を送って帰ったのだ。

なぜか、今日の真冬はそれを辞退しようとしていたけれど。帰り道も、真冬は言葉少なにうつむいていた。

千尋の病室から出るなり、うってかわったその態度に、信は途方に暮れながらここまでやってきた。

何か気に障ることもしただろうか、と道々考えてきたが、結局わからなかった。信は力無く、真冬に笑顔を向けた。

「じゃあ、また明日」

真冬は顔を上げて、信を見つめた。病院を出て以来、初めて。

その視線は別れを惜しむと云うより、突き刺すような激しい光があった。

信はひるみつつも、目をそらさず、じっと見つめ返した。

「上がっていけば」

「……え……？」

昨晚、この同じ場所で交わした言葉のように。あまりに思いがけない申し出を受けて、やはり今夜も信は、ぼかんと口を開けていた。

真冬は苛立たしげに視線をそらし、門をくぐった。信も慌ててついてくる。

信とは違い、真冬にはわかっていた。なぜそんなことを云ったのか。

けれど、わからない振りをしていたかった。

\*

「珈琲でよかった？」

「あ、うん」

額く信の前に、真冬が珈琲カップを置いた。

二人は客間にいる。十分ベッド代わりになりそうなソファに座り、信は居心地悪そうだった。真冬は自分のカップを手手に、彼の向かいに腰掛けた。

「外から見ても思ってたけど……立派な家だね……」

カップを口に運びながら、信は室内を見回した。家具の善し悪しなどわかるはずがないが、自分が今持っているカップも含めて、高級なものばかりであることはわかった。

しかし、信は感心すると同時に、奇妙な寒々しさも感じていた。あまり生活感がないのだ。だだっ広いショールームを連想させた。

信のそんな感想に気づいているのか、真冬は相づちを打つこともせず、珈琲を冷まし冷まし飲んでいった。彼女は猫舌なのだ。

信は視線を真冬に戻した。真冬はうつむいて、カップの中の波紋を見つめている。

何を話せばいいのか。何を話したかったのか。

互いにそれを探るような沈黙が続いた。

やがて、信のほうで飲み終えたカップを机に置いて、口を開いた。

「その……今日は、ごめん」

「なにが」

カップを見つめたまま、短く真冬が答える。彼女はゆっくり飲んでいたので、まだ半分以上珈琲は残っていた。

カップを揺らすたびに生じる、茶色の波紋。それだけを、真冬は見ている。

「その……突然、押し掛けたりしてさ。やっぱ、失礼だったよな」

「そのことなら、いいわ。連れていったのは私だし、母も、喜ん

「でくれたから」

「そう……なら、いいんだけど」

再び沈黙。所在なげに信は視線をさまよわせ、真冬は一点を見つめ続けた。

実のところ、信より真冬のほうが遙かに大きな戸惑いと、焦燥の中にいた。

私は、何をしているのだろう。いったい何を期待しているというのだろうか。

「えっと……お母さんは……いつから……？」

「忘れたわ。もうずっとずっと前から」

「そんなに……？」

感情のこもらない声で、真冬は信の問いかけに答えていく。

淡々と、そう、その問いが発せられるまでは。

「じゃあ、ずっとここにお父さんと二人で暮らしてるんだ……？」

言葉の意味を咀嚼するような、静かな時間が流れる。

真冬は伏せていた目をゆっくり上げて、信をまっすぐに見据えた。

信は、軽く息を飲んだ。

さつき門の前で見せた、挑むような、責めるような、拒むような、泣き出しそうな、瞳。

「父は、いないわ」

「……え……？」

「私、私生児だもの」

「……」

空気が凍ったと、信は考えた。

何かが崩れたと、真冬は直感した。

だから、そこにあるのは、沈黙だけだった。張りつめた気配の中、二人は瞬きもせず、ただじっと互いの瞳を覗き込んでいた。

視線を外したのは、真冬のほうからだった。

彼女は立ち上がり、キッチンに入った。そして、珈琲のお代わりを入れて戻ってきた。

「もう遅いから、それを飲んだら、お帰りなさい」

「え……」

信が顔を上げると、真冬は、ニツ、と唇の端だけで笑って見せた。

いつもと同じ、猫のような印象を与える、その笑み。

今日のことなど、何もなかったかのよう。

実際、真冬はそう思っていた。きっと何も変わらない、だから、何もなかったのと同じ。

だから、信にも、いつもと同じように、笑ってほしかった。

だが信は、肩を震わせて面を伏せてしまった。真冬は軽く眉をひそめながら、ソファに座り直した。

「その……俺、なんて云っていいか……」

「何も云わなくていい。……云ってほしくない」

声を震わせながら、一所懸命、言葉を紡ごうとする信。

そんな彼を、真冬は乱暴に遮った。

信が顔を上げて、真冬を見る。涙に濡れた瞳を、どうしても真冬は正視できなかった。

「どうせみんな、同じことしか云わない。私も、同じ答えしか返せない。飽きたわ」

「先輩……」

自分でも不思議なくらい、真冬は苛々していた。もうこんなことは慣れっこだったはずなのに。

誰もが、自分の境遇に同情してくれる。そして自分の態度に、眉をひそめる。

それでもまだ気を遣う人は、「強い娘だ」と云い、そうでない人は「かわいげがない」と云う。どちらも大きなお世話だっ

た。

「淋しくなんかなかった、なんて強がり云う気はないわ。母が入院して、しばらくは淋しかった。でも、もう慣れたわ。見てのとおり、生活には困ってないし。お金はあるのよ、事情があつてね」

「……」

「だから、何も気にしないで。……もう、慣れてるから」

「……」

信は答えない。ただ潤んだ瞳で、まっすぐに真冬を見つめていた。

真冬は信から視線をそらしたまま、強く唇を噛んだ。

どうして、どうしてこんなに苛々するんだらう。

彼が口にする言葉を、どうして、私はこんなに恐れているのだらう！

耐えられず、真冬は信にもう帰るよう促そうとした。

そのとき、信が小さな声で、呟いた。

「……ダメだよ」

「……え？」

思わず、真冬はその顔を信に向けた。そのまま、信から目を背けられなくなる。それほど信の瞳は真剣だった。

「ダメだよ、慣れただなんて云っちゃ」

「稲穂くん……」

「そんなの、慣れるもんじゃないよ。……そんなこと、云うなよ」

「……」

真冬は茫然と、信を見つめ返していた。

同情ではなく。憐憫でもなく。

ただ彼は、私が選んだ生き方を、自分の痛みとするのだからか。

真冬の胸を、押さえようのない、激しく熱い感情が支配した。

「……だったら……どうしろって云うの……」

「先輩……」

「淋しいって、泣いてすがれば満足なの？　ひとりでこの家にいる現実、慣れる以外、どうすることができたって云うのよ!？」

激情が込み上げ、涙がこぼれそうになる。真冬は目を強く閉じて、それをこらえた。

涙なんて、絶対に見せたくなかった。　そう、信にだけは。

「……帰って」

「……」

「帰ってよ!」

目を閉じたまま、真冬は面を伏せて叫んだ。世界のすべてを拒むかのように。

やがてどれだけの時間が経った頃か、人が静かに立ち上がり、去っていく気配があった。

ドアが閉まる音を確認して、真冬は顔を上げた。そのまま体を横にして、ソファに倒れ込んでいく。

真冬は部屋の隅をじっと見つめ続けた。その瞳に涙はなく、光さえなかった。

何も映さない瞳を、ただ真冬は見開いて夜を過ごした。

そして、すべてが元通りに戻った。

真冬と信が、あの公園で出逢う以前の姿に。

真冬はもう放課後、信を待つことなく帰宅する。昼間、学校で信と顔を合わせるころがあっても、見知らぬ人のように振る舞っていた。痛ましげに自分を見つめる視線を、完璧に無視して。

家に戻り、誰もいない部屋でぼつんと座る。さっき入れた珈琲が冷めるのを待ちながら、真冬は考えた。

これでよかったのだ、と。信のことが気になったのは事実だ。放っておけない、そう思った。

でも、自分のような人間には、そんな気持ちには似合わない。

彼だって、もう自分がついていなくても大丈夫だろう。：

あるいはもっと、ふさわしいひとが。

真冬はカップに手を伸ばし、口をつけた。

「……熱っ」

まだ十分冷めていなかった珈琲を一息に飲もうとして、舌を火傷してしまった。

かすかににじんだ涙を、真冬はその痛みのせいにした。

\*

「あ……」

ホームルームが終わるや、いつもどおりすぐ帰途につこうとした真冬は、ふと窓の外を見て咳きを漏らした。

暗い曇天から、ぱらぱらと雨が降り始めている。

帰宅時間を狙い澄ましたかのようなその雨に、クラスメイトたちが口々に文句をこぼす中、真冬は硬い表情で立ち尽

くしていた。

考えまいとしたこと、忘れようとしたことを、雨は思い出させる。雨はあまりに、彼との想い出と結びつきすぎているから。

気がつけば、教室にはもう誰もいなかった。

真冬は大きくため息をつく。机の中から折り畳みの傘を取り出した。それを見て、もう一度ため息をつく。あの日と同じ傘だから。

こんなときのために学校に置いてある傘なのだが、明日からは違うものを持ってこよう。そう考えながら、真冬はその傘を持って教室を出た。

人気のほとんどない廊下を歩き、昇降口に出る。そして、靴に履き替えようとしたとき、後ろから声をかけられた。

「藤村先輩」

誰も気づかないほど小さく、だが確かに、真冬は体をすくませた。全く違う声だと、わかっていたけれど。

真冬がゆっくり振り向くと、陸上部の一年後輩の男子が立っていた。すでにジャージに着替え終わっている。雨が降り出したから、屋内トレーニングのため、体育館に向かうところなのだろう。

「お久しぶりです」

少年は少し緊張した面持ちで、頭を下げた。真冬は軽く頷いて、それに答えた。

「ん……。なに？」

「えっと……藤村先輩って、稲穂とつきあってましたよね？」

「……」  
わざわざ否定したり、説明したりするのも面倒だった。真冬は何も云わず、首を傾げて話の続きを促した。

少年は、真冬はその仕草に、慌てて視線をさまよわせた。

「あ、す、すいません、なんか失礼なことを」

「……で、なに？」

「えっと、その、稲穂の奴、最近、練習に出てこないんですよ」



「……え？」  
 「何度云っても、『大事な用事がある』とか云うばかりで……  
 ……顧問も怒ってるんで、それで、藤村先輩なら何か知ってる  
 かと思って……」

真冬の瞳が、ずっと細くなった。そのままわずかな時間考  
 え込み、あることを想像して、小さく息を飲んだ。

「……まさか……」

「え？」

不審そうに顔を向けた少年に、なんと答えたか真冬は覺  
 えていない。靴を履くのもどかしく、校舎から走り出してい  
 た。  
 傘を差すことさえせず、真冬は勢いを増し始めた雨の中  
 を走った。

果たして、そこに彼はいた。

あの日と同じ公園に。あの日と同じ木の下で。あの日と同  
 じ雨の中。

だが、ひとつだけ、あの日と違う点があった。彼は、ひとり  
 ではなかったのだ。

「今日も、ここでずっと待ってる気なの？」

「……」

「いつまでこんなバカなこと続ける気なの！」

信に詰め寄る女性は、環だった。真冬に見せた表情とは別  
 人のように、頬を激情で赤くしている。

それに対して、信は何も答えず、ただ悲しげに眼をそらす  
 だけだった。

二人とも、真冬には気づいていない。真冬も声をかけられ  
 ず、白い息をつきながら立ち尽くしていた。

「いくら待ったって、あの女は来ないわよ！ あの女はね、自  
 分ひとりだけいればいいの。ひとりだけで生きていける、そう  
 思ってるんだから！」

「……」  
 環の言葉は、真冬にはなんの動揺も与えなかった。

そのとおりであったから。ずっとそう思って生きてきた。

「……」  
 ……だけ。だったら、なぜ、私は今、ここにいるんだろ  
 う？

「わかってるんでしょう？! あの女は、誰も必要としていな  
 い。あなたが必要なのは、あの女じゃなくて」

「わかってる」

小さく、信が呟いた。悲しい色の瞳をした少年を、真冬と  
 環は、息を飲んで見つめていた。

「藤村先輩が必要としているのは、確かに、俺じゃないかも知

れない。だけど、今、彼女のそばにいてあげられるのが俺だけなら、そうしてあげたい」

「信くん……」

「彼女を、ひとりになんか、できないよ」

そう云って、信は笑った。

その笑顔に、環の面は血の気を失い、真冬は茫然と言葉を失った。

「……なによ、それ」

かろうじて、そんな言葉を呟く。

自分こそが、彼を見守っていたはずだ。あの雨の日に見せた、優しさの裏にある脆さ。それを知ってしまったから、放っておけない、そう思っていた。

それなのに。彼もまた、同じことを考えていたというのだろうか。

我知らず、真冬は公園に足を踏み入れていた。泥をはねる足音に、信と環が同時に振り向く。

「藤村先輩……」

一言云って、信はまた笑った。真冬にはずっと不思議だったその笑顔。何がそんなに、嬉しいんだろう。

「……」  
一方、環は、血がにじむほど唇を噛みしめて、真冬を睨みつけた。

真冬はその二つの視線を受けて、どんな顔をすればいいのか、本当にわからなかった。自分がなぜ、ここに立っているのかも。

だから、真冬は表情のない顔で、雨に打たれるまま二人を見返した。

信が真冬に駆け寄り、とす。それを制そうとするかのよう、環が足早に真冬に近づいた。

眼鏡の奥の瞳に、涙が浮かんでいる。真冬はやはり感情を表さず、ぼんやりとその目を見つめていた。

「……絶対、後悔するわよ」

吐き捨てて、環は走り去った。真冬は振り返り、その後ろ姿を茫然と見送った。

信がゆっくり真冬に近づいてくる。背を向けたままの真冬の手から折り畳み傘を取り、それを開いた。

「ほら、どうしたんだよ、先輩。傘も差さずにさ」

「……」

「ま、俺も傘持ってたから、ラッキーだったけど。早く帰る。そのままじゃ風邪引いちゃうよ」

「……」

真冬は答えない。ただ信に促されると、人形のようにゆっくりと歩き始めた。

信はためらいがちに腕を伸ばし、真冬の肩を抱いた。真冬はやはり反応しない。信も何も云わず、ふたりは沈黙したまま、寄り添って歩いた。

「ついたよ、先輩」

結局、真冬の家に辿り着くまで、ふたりは無言のままだった。

門の前に立っても、真冬は動こうとしない。信は真冬の肩から腕を外し、門を開けてやった。

そのとき、真冬はぶるっと体を震わし、自分の肩を抱くようにした。

「寒い？ 早く風呂入って、体あつためて……」

「私の名前」

「……え？」

真冬はゆっくりと顔を上げて、心配そうに覗き込んでいる信の瞳を見つめた。

先日ともまた違う真冬のその表情に、信の胸は切なく痛んだ。そう、今の彼女はまるで幼い子供のように

「私の名前……『真冬』なんて、寒そうな名前でしょ？」

「先輩……？」

「母がつけてくれた名前だけど……あんまり、好きじゃなかった。母はね、冬の厳しさに負けない、凜とした強さを持つるように……そんな願いを込めたって、云ってた。自分には……ないものだから……」

「……」  
淡々と、独り言のように真冬は呟く。けれど、その視線はまっすぐ信に向けられ、そらされることはなかった。そして、信もまた、その瞳をまっすぐに見つめていた。

「寂しさは……母の体まで、蝕んだ。だから、私には強く育ててほしかったのかも知れない……そう、新堂さんが云ったとおり……私は……ひとりでも生きていける……」  
「先輩……」

「……でも、そんなの、可愛くないよね」

そう云って、真冬は微笑んだ。

自嘲ではなかった。強がりでもなかった。

ただ信に、思った通りのことを、聞いてほしかった。

信はそんな真冬の笑顔をしばし見つめ、やがてぼつりと呟いた。

「強いだけじゃ……冬は、越せないと思う」

「……え……？」

軽く眉をひそめる真冬。信は真剣な面持ちで、言葉を続けた。

「寒い冬にはさ、ぬくもりが必要だよ。どんなに強かったって、あったかいもんがないと、凍えちまう。お母さんが云いたかったのは、そういうことじゃないのかな」  
「稲穂くん……」

考えてもみないことだった。目を丸くした真冬の表情が珍しかったのか、信は満面の笑顔を浮かべた。本当に、嬉しそうな笑顔。

だが、すぐ真剣な表情を取り戻して、真冬の瞳を覗き込んだ。

「俺は……『真冬』って名前、好きだな」

「……」

「俺は……真冬が好きだ」

「……」

真冬は、唇の端だけで笑おうとした。いつもと同じ、猫のような印象を与える笑顔。

けれど、どうしても失敗してしまい、瞳から涙がこぼれた。

「……生意気よ……信……」

「ごめん」

云いながら、信は真冬の体を抱き寄せた。真冬は目を閉じて、まだぎこちない彼の口づけに身を任せた。

このとき手に入れたものが、永遠だとは、真冬も思っていなかった。

しかし、訪れた穏やかな時間は、真冬の想像を遙かに超えて、あまりに短いものだった。

\*

雨は夜が更けるに連れて、どんどん激しくなっていた。真冬は窓辺に寄り、カーテンを少しめくって外を眺めた。打ち付ける豪雨。

真冬は一瞬眉をひそめたが、不意に浮かんだ不安を打ち消すように、苦笑を浮かべた。

(……もう、とづくに帰ってるはずの時間だものね)

あのあと、信は自分自身の言動に照れたのか、顔を赤くして走って帰った。傘を持っていくように真冬は云ったのだが、「このぐらい平気だって。すぐやむよ。帰ったら電話するから！」

そう叫んで、信は雨の中走っていつてしまった。

真冬はその姿を苦笑しながら見送り、家に入って、シャワーで体を温めた。そして、普段どおり自分で準備した食事を終え、食後の珈琲を楽しみ、それなりの時間、読書をしていたのだったが。

信からは、まだ電話はなかった。

自分のほうからかけてみようか、と考えたときには、少し気の引ける時間になってしまっていた。もっと早く気づけばよかった、と真冬は後悔した。

これまで真冬から信の家に電話をしたことはなかったの、ちょっと気後れがあった。それに、電話を待っている時間、というのも、意外に心地よいものだったのだ。

だが、それにしても遅すぎる。自分は一人暮らしだから、何時にかかってきても確かに平気だけど。

思い切って真冬は立ち上がり、電話のそばに立った。そして、受話器に手を伸ばした瞬間。

玄関のベルが、鳴った。

こんな時間に、なんだろう。真冬は玄関に向かいながら、そう考えた。

普段なら、こんな時間の来訪者に応対することはない。なんと云っても、女の一人暮らしなのだ。

だが、真冬は言い知れぬ不安を感じ、ドアの前に立った。

「どちら様ですか？」

返事はない。真冬はひとつ深呼吸をすると、鍵を開けて、ドアノブを回した。

危険だと、わかっていた。けれど、どうしてもそのままにはできなかった。

そうして、真冬は見た。雨に打たれるまま、門の前で立ち尽くす一人の少年を。

その瞬間、真冬は自分も雨に濡れることなど構わず、飛び出していた。

「信……！ どうしたの、こんな時間に、そんな格好で！」

うなだれ、自分のほうを見ようともしない信の元へ真冬は走った。

しかし、信は答えず、真冬の腕を振り払いさえした。

「信……？」

信の体は、小刻みに震えていた。それは雨に濡れた冷たさのせいではなく、何かを恐れていることが、その表情からわかった。

そのとき、真冬は思い出した。あの雨の日、猫を抱いて泣いていた信の姿を。

真冬は濡れて頬に張り付く髪をかき分けながら、信に笑顔を向けた。

なにがあったかはわからない。しかし、あのときと同じように壊れかけている信を、少しでも安心させてあげたかった。

ゆっくり手を伸ばし、あのときと同じく、信を抱きしめようとする。だが、気がついたときには、真冬のほうに強く抱きしめられていた。

「真冬……俺は……俺は……！」

信は真冬の胸にすがりつくようにして、泣き叫んでいた。  
真冬もまた信の背に腕を回し、強く抱いた。冷えた体を温めるように、何度もその背をさすりながら、呼びかけ続けた。  
「信、どうしたの？ 何があったの？ 信」  
「冷たい晩秋の雨が、固く抱き合うふたりの上に、容赦なく降り注いでいた。」

冬物語  
（冬）

1

カーテンの隙間から、朝日が差し込んできた。

真冬は軽く眼を細めて、その光を見つめた。

一睡もしていなかった。ただ、腕の中にいる少年が安心できると、髪を撫で、背中を撫で。彼がようやく眠ったあとは、ぬくもりが伝わるよう、強く抱きしめたままで。彼が目覚めれば、いつでも微笑みかけてあげられるように。

そうして、夜が明けるまで過ごしていた。

真冬と少年 信は、居間のソファにいる。信をソファで横に寝かせ、真冬が膝枕をしてやっている形だった。

「……ん」

真冬のわずかな動きに反応したのか、信が目を覚ました。何度か目を瞬かせ、辺りを窺う。自分がどこにいるのか、わかっていない様子だった。だが、笑顔で覗き込んできた真冬と目が合うと、一瞬、驚きに目を丸くし、そして、次の瞬間、蒼白になった。

「真冬……！ 俺……俺……！」

「……大丈夫」

慌てて起き上がるうとする信を、真冬はそっと押さえた。落ち着かせるため、信の髪を優しく撫でる。信はそれでもまだ怯えた様子だった。

「ここは、私の家よ。私たちふたりしかない」

「……」

信が深いため息をつく。安堵に緩んだ面は、しかし、すぐ小刻みに震え始め、瞳には涙が浮かんできた。

それでも真冬は笑みを絶やさな。そんな真冬の視線が

ら逃れるように、信は腕を上げて顔を覆った。

「何があったのか……云いたくなければ、云わなくてもいい」

「……」

「だけど、私はここにいるから。ずっと、いるから」

「……真冬……」

「まだ早いわ。もっと眠ってもいいのよ」

云いながら、真冬はまだ信の髪を撫でていた。

信は深呼吸を繰り返して、自分自身を落ち着かせた。ゆっくり、時間をかけて。真冬はただそれを見守っている。

やがて、信が腕を降ろし、真冬の顔を見上げた。まだ瞳には涙が浮かんでいたが、まっすぐに真冬と目を合わせた。

「俺……人を、殺した」

「……っ」

さすがに、真冬も一瞬、表情を強ばらせた。

信はじつと真冬を見つめている。真冬も目をそらすことなく、答えた。

「……嘘、よね？」

「……俺が……殺したのと同じだ……」

信の瞳に浮かんだ涙が盛り上がり、こぼれた。頬を伝う涙を、真冬はそっと指でぬぐってやった。

信はぼつぼつと、昨晚の出来事を語り始めた。

帰り道、信の予想に反して、雨足はどんどん激しくなっていた。とにかく急いで帰ろうと、信は周りをろくに見ずに走っていた。そして、ある横断歩道に差し掛かったとき。前方から

白い傘を差した少女が歩いてくるのが見えた。

その白い傘が、やけにぎらついて見えた。それはトラックのライトを浴びたせいで、と気づいたときには、もう間にトラックが迫っていた。信が息を飲んだ瞬間。

「危ない！」

少女の声が響くと同時に、信は突き飛ばされていた。続く急ブレーキの音。小さな悲鳴。

そして、雨に打たれて、路上に転がる白い傘。

「頭が真っ白になって……気がついたら……逃げ出してた……」

「どうしていいかわからなくて……真冬のところに戻ろうと……してた……。最低だ……。俺……。ごめん……」

「……うん」

微笑んで、真冬はもう一度、信の髪を撫でた。  
不謹慎だとは思ったけれど、ぎりぎりの状況で自分を頼ろうとしてくれたことが、真冬には単純に嬉しかった。

信は真冬の手のぬくもりに目を閉じ、言葉を続けた。  
「でも……途中で……自分が何をしたか……。気づいた……。あの子は俺を助けてくれたのに……。置き去りにして……」

「……」

「だから……。もう一度、そこへ戻って……。だけど……。もう、あの子はいなくて……。ただ……。白い傘と……。その前で……。泣き崩れる……。男が……。！」

信の閉じた瞼から、また涙があふれた。その体が激しく震える。

真冬は思わず信の頭を抱えるように、強く抱きしめていた。

「もういい……。もういいから……」

「俺が……。俺が殺した……。！」

「やめて……。！ お願ひ、もうやめて、信！」

真冬が信の頬に、自らのそれを重ねる。その熱さに、流れる涙に、信はようやく我に返った。

「……真冬……」

「それがあなたの罪なら……。私も同じだわ……」

「な……。っ、どうして……。!?」

「あのとき、あなたが雨の中、走って帰るのを私が止めていれば、こんなことにはならなかったのでしょうか？」

「それは……」

「そもそも、あなたがあの公園で私を待っているようなことが

なければ、こんなことにはならなかった……。私が……。あなたを……」

「違う！ 違うよ、真冬！」

信は起きあがり、真冬の肩を掴んだ。そして、涙に濡れた瞳でじっと自分を見つめる真冬の姿に、胸を突かれる想いがした。

そのあまりに心細げな表情は、一瞬、信に自責の念も後悔も忘れさせた。

「じゃあ……。信も、そうやって自分だけを責めるのはやめて……。事故だったのよ。誰の責任なんて……。考えても、意味がない……」

「真冬……」

「ね？ もちろん、ただしよがなかった、なんて開き直ることができないのはわかってる。これからのことは、ふたりで考えましょう。今はとにかく、気持ちを静めることが大切よ」

「……」

「ね。信、わかって」

「……うん」

わずかに頷いた信を、真冬は手を伸ばしてもう一度抱きしめた。

あの猫が死んだ日。真冬は信の心が壊れるのをとどめるため、彼を胸に抱いた。

だが今は、真冬こそが何か怯えているように、強く抱いていないと愛しいものが失われると信じているかのように見える。

「真冬」

「……」

「……真冬？」

「え、あ、なに？ お母さん」

花瓶を抱えたまま、ぼんやりと窓の外を眺めていた真冬は、母の声に我に返った。

母・千尋が心配そうに自分を見つめている。真冬は無理矢理微笑んで見せた。

「大丈夫？ 具合でも悪いの？」

「ううん、平気。ちょっとぼんやりしちゃっただけよ」

そう云って、真冬は花瓶を窓のそばに置いた。信が持ってきた花も古くなってしまったので、替えてきたところだった。捨てるのも惜しいから、持って帰ってドライフラ

ワーにしようか。ふと真冬はそんなことを考えた。

あれから、丸一日が経った。今は日曜日の昼下がりで。

あのあと真冬は、ゆっくり休むよう言い聞かせて、信を家に帰した。真冬にとってはまだ心配であったが、前の晩、無断外泊をさせてしまったので、これ以上引き留めておくとは問題になってしまう。家の人に事情を話したところで、それでもまだ信を自分のそばに置いておけるとは考えられなかった。

夜になって電話をしてみたが、信は出なかった。真冬は言い知れぬ不安を抱えて夜を明かし、千尋の見舞いに来た。

本当は、母に相談したかったのかも知れない。けれど、その顔を見ると、やはり余計な心配はかけたくないと考えてしま

う。そんな逡巡が、知らず知らずのうちに現れていたのだろう。真冬は本心を隠すため、いつものように唇の端だけで笑ってみせた。

「夕べ、本読んでたら遅くなっちゃって。寝不足かな」

「……そう」

頷きつつ、じっと千尋は真冬を見つめてくる。胸の内を見透かされそうでも、真冬は視線をそらせて窓の外を見た。

そのとき、救急車が病院に入ってくるのが見えた。サイレンの音が木霊する。

真冬の胸に、ずきり、と痛みが走った。

千尋はそんな真冬の後ろ姿を見守りながら、言葉を続けた。

「それだけなら、いいんだけど。体には本当に気をつけてね」

「……うん、わかってる」

「おとこの夜、事故に遭って、この病院に運ばれた女の子がいたの。あなたと同じ年ぐらいだったそうよ。……可哀想に」

「……え……」

一昨日の夜。事故に遭った少女。それは。

むしろ緩慢な仕草で、真冬は振り返った。

押さえようとしても、体が細かく震えてしまう。

千尋は面を暗くして、うつむいていた。同じ年頃の娘を持つ親として、その子の無念さや、残された者の悲しみがわかるからだろう。

「それで……その子は……？」

震える声で、真冬が問う。

千尋は目を閉じて、小さく首を横に振った。

真冬は崩れ落ちそうになるのを、どうにかこらえた。

せめて生きていてくれたら。そう願いつつ、確認するのが怖くて、昨日から新聞もテレビも見なかった。それで起こった出来事が、変わるわけではないのに。

信は。信はどうしただろう。もうそのニュースを、知ってしまったらどうか。

「……真冬？ どうしたの？」

「……」

蒼白になって震える真冬の様子に、千尋も気づいた。真冬は答えることさえできない。



「やっぱり具合が悪いの? ……それとも……知っている子

……?」

「! ううん、気分が悪いだけ……」

何の説得力もない、棒読みの台詞。自分でもそうわかっていながら、真冬は取り繕うこともできず、ふらふらとドアに向かった。

「ごめんなさい、今日はもう帰るから」

「真冬? 待ちなさい、真冬、あなた、おかしいわよ?」

「大丈夫、ほんとに気分が悪いだけだから……。ごめんね、心配かけて。また来るから……」

「真冬!」

母の叫びを遮るように、真冬はドアを閉めた。壁にもたれかかり、息を整える。

そして、顔見知りの看護婦を捜した。

\*

真冬が病院で聞いたその場所へ辿り着いたのは、ちょうど出棺の時間だった。

白木の棺のそばには、すでに涙も枯れ果てた様子で、茫然と立ち尽くす少年と、自分自身も涙で瞳をいっぱいにながら、それでも少年を支えようとするように寄り添う少女がいた。

そして、思わず目をそらした真冬の視線の先には。

離れた場所から、その二人を食い入るように見つめる信の姿が、あった。

「……………」

信の面はそれこそ死人のように血の気を失い、全身が小刻みに震えていた。

それでも信は彼らをまっすぐに見据え、足を踏み出そうとした。

その動きを見た瞬間、真冬は信に走り寄って、その腕を掴

んでいた。

「真冬!」

狼狽する信に答えず、真冬は無理矢理信を路地の陰に引き込んだ。そして、葬儀に参列する人々から見えない位置まで来ると、初めて信を睨むように見た。

「……………何をする気なの」

「何って……………」

「こんなところに姿を現して、『彼女が死んだのは自分のせいです』って告白するつもり? そんなことしたら、どんな目に遭うか……………」

「いいんだ。そのほうが……………いい」

「信……………」

「殺されたって、俺は文句は云えない。だから……………」

「やめて! そんなことしたって、みんな傷つくだけじゃない。どうして……………そんな……………」

悲鳴のような声をあげる真冬と対照的に、信は淡々と呟いていた。その態度から、信がどれだけ真剣か、真冬にはわかった。

真冬は信の腕を掴む力を強めた。すがりつくように。

信はそんな真冬と、目を合わせようとはしなかった。

「お願い、信、もう少し待って。今はきっと、お互い感情的になりすぎるわ。だから」

「……………」

「お願い……………」

信は目を強く閉じ、拳を振るわせていた。だが、やがて体の力を抜くと、諦めたように深い息を吐いた。

真冬もまた安堵の息をつき、信を抱きしめた。

信が自責の念で自分を追い詰め、壊れてしまうことが、真冬は怖かった。

あの雨の日も。ふたりで迎えた朝も。そして、たった今も。ただ彼を守ることだけを真冬は考えていた。そのはずだった。

そして、季節は急速に冬の気配を強めていく。つい先週末までは、まだ秋の穏やかさが感じられたのに。今では空気さえ凍てつくように冷たい。

それとも、それは私の心が、そう感じさせるのか。真冬は唇を噛んで、フェンスにかけた指の力を強めた。

学校の屋上に、真冬は一人、立っていた。すでに五時間目は始まり、辺りに人の気配はない。それでも真冬は、フェンスを掴んだまま、硬い表情で虚空を見つめていた。

そんな彼女を咎める者は、偶然通りかかった教師ぐらいのはずだったのだが。

「何してるの、こんなところで」

不意に声をかけられても、真冬は全く動じず、ただ流し目だけで屋上への入口を見やった。

そこにはドアにもたれて、真冬をまっすぐに見つめるいや、睨んでいる、眼鏡をかけた少女がいた。

真冬は答えず、またすぐに視線を空に戻した。

少女 環は舌打ちすると、真冬の隣まで歩いてきた。真冬はやはり彼女を見ようとほしめない。

「信くん、今週に入ってから、学校に来てないんだってね」

「……」

「もう四日目だっていうじゃない。……あんた、彼に何をしたのよ？」

何があったのか、ではなく、何をしたのか。その問いかけは、真冬を苛立たせた。

自分のせいであれば、どれだけいいだろう。それなら、きっと何かできることがある。

ただ信は、ただひたすら自身を責めるばかりだ。日曜以来、真冬に逢おうともしないし、電話にも出ない。真冬にはただ、信がバカな真似をしないよう、祈るしかなかった。

それなのに。

「あなたには関係ない」

ただ一言、真冬は吐き捨てた。

幼馴染みだかなんだか知らないが、もうこれ以上、自分たちの問題に踏み込んでくるのは許せなかった。

環はその言葉に、一瞬、蒼白になって顔を引きつらせたが、すぐに笑みを浮かべた。それは確かに、嘲笑だった。

「ふうん。関係ない、ね」

「……」

「そうよね。あんたはいつだって立派なもの。一人きりで生きていけるのよね」

「……」

真冬は軽く息を吐くと、身を翻してドアへ向かった。もう環の相手をする気にはなれなかった。しかし。

「……だったら、どうして信くんに関わったりしたのよ」

「……え？」

独り言のような呟きが、真冬の足を止めさせた。

振り返ると、環は相変わらず、嘲るような笑みを浮かべていた。それなのに、なぜか瞳には涙が浮かんでいた。

そのアンバランスさが、真冬を戸惑わせた。

「彼を守ってあげられると思ったの？ 彼を救うことができるとでも？」

「……」

「無理よ。あなたにはできっこない。だって、あんたは一人で生きてきたんじゃない。一人でしか生きられないんだもの」

「……な……っ」

思わず息を飲んだ真冬に、環は歩み寄った。

真冬はつい後ずさってしまふ。誰かに圧倒されたことなど、一度もなかったのに。なぜだか真冬は、自分でも不思議なくらい動揺していた。

「あんた、いつも私たちをバカにしたでしょ。自分は強い、特別な人間だって」

「そんなこと……」  
 「そういうとこ、すごくむかついた。……だけどね、ちょっとだけ懂れてもいたんだ。悔しいけど、そういう風に生きていたら……」

刹那、環は優しい微笑を浮かべた。

しかし、真冬が驚いて眉をひそめたときには、再び嘲笑がその面に張り付いていた。

「でも、信くんと出逢って、変わっていくあんたを見て、わかったの。あんたもただのメッキだったって。あんたは一人であることで、自分を守るうとしてただだよ」

「……！」

「そんなあんたが、どうして他人を守れるの？ あんたにできるのは、自分を守るために、他人を傷つけることだけよ！」

「……違う……」

あまりに弱々しい声で、真冬は首を振った。対照的に、環はさらに声を大きくして詰め寄ってくる。

「違う？ 何が違うの？」

「私は……私と信は……そんなんじゃ……」

そう。彼は云ってくれたのだ。そばにいと。

だから。

（え？）

だから、私は？

真冬が心の奥深くに沈めて、気づかないようにしてきたことが、浮かび上がるうとした瞬間。

「お前ら、こんなところで何をしてる!？」

入口のドアが開き、教師の怒声が響いた。

環は舌打ちして面をそらし、真冬は蒼白になってうつつむいた。

「藤村に……新堂？ いったい……」

素行も成績も特に問題のない二人を見て、教師は不審そうにしたものの、警戒を解いた。

その隙をついて、真冬は駆け出ししていた。

気がついたときには、千尋が入院している病院までやってきていた。

真冬は白い建物を見上げ、唇を噛んだ。

母に心配をかけたくはない。だけど。

（あんたは一人でしか生きられないんだもの）

そんなはずがあるだろうか。自ら望んで、ひとりになどなるはずがないのに。

真冬は確かに打ちのめされていた。だから、誰かにそれを否定してほしかった。

そして、信に逢えない今、彼女が孤独を感じずにいられるのは、母のそばしかなかったのだ。

体を引きずるようにして、真冬は千尋の病室の前まで来た。そうして、ノックをしようと手を上げたとき、中から話し声が聞こえてきた。

「……！」

その声を聞いた瞬間、真冬は逆上していた。

そのままノックもせず、ドアを乱暴に押し開けた。

「真冬……！」

千尋が息を飲む気配がわかる。

だが、真冬は千尋のほうを見ようとはせず、その傍らに立つ紳士を睨みつけていた。

歳は五十前後だろうか。上品な装いで、穏やかな風貌をしていた。もっとも、今は驚愕と悲しみで、その表情はゆがんでいたが。

男の名は、御堂拓磨<sup>みどうたくま</sup>。かつて、千尋が愛したただ一人のひと。

「……何をしてるの……」

「私たちの前に、一度と姿を現さないって約束でしょう!？」

「このこ、こんなとこまでやってきて、どういっつもりよ！」

「真冬！ お父さんになんてこと……」

「私にお父さんなんていない」

思わず間に入った千尋の言葉を、一言で真冬は切り捨てた。

拓磨の表情に、悲嘆の色がいつそう濃くなる。その面から真冬は忌々しげに目をそらし、母に視線を向けた。

「お母さんもお母さんよ！ どうして、こんな人を中に入れてたの!？」

「真冬……」

千尋は悲しげに真冬を見つめる。その瞳の色からあることに気づき、真冬は絶句した。

「……まさか……これまでも……逢ってたの……?」

面を伏せる千尋。それは肯定を意味していた。

真冬は思わず母のそばに駆け寄り、その腕を掴んでいた。「どうして? 私に嘘ついてたの? 一人きりの親子だから、そう云ってたじゃない。どうして……!」

我知らず、涙がこぼれてくる。こんな男の前で泣きたくない、真冬は強くそう願ったが、どうしても涙を止められなかった。

悔しくて、悲しくて、心が痛くて。

「……真冬。母さんを責めないでくれ。私が」

涙に濡れたままの瞳で、真冬は再び拓磨を睨みつけた。

悲嘆と絶望のさなか、それでも強い意志を宿したその表情は、夜叉のように美しかった。

拓磨は娘のその凄絶な美貌に息を飲みながら、言葉を続けた。

「お前が私を憎むのは当然だ。だが、それでも、私はお前たちにできるだけのことをしてやりたい」

「それが私の……せめてもの償いだ」

「償い……?」

千尋から体を離して、真冬は真っ直ぐに立った。未だ流れる涙を拭おうともせず、けれど、唇の端だけで、ニツ、と笑ってみせる。猫のよう、と彼女が呼ばれる由縁。

「笑わせないで。確かにお母さんが入院していて、それでも私たちが生活していけるのは、あんたがくれたお金のおかげよ。」

それが……償い?」

「真冬! もうやめなさい!」

「猫でも飼ってるつもりなの? 餌だけやってれば、それで満足するとも」

「真冬……!」

母の声が、その涙が、ようやく真冬に口を閉ざさせた。どれだけ罵っても足りることはない。できることなら、いっ

そ殺してやりたい。

けれど、母を悲しませることは、したくなかった。

「……帰る」

咳いて、真冬は体を翻した。ドアを閉めるとき、千尋の肩を抱いて慰める拓磨の姿が見えた。

真冬は血が滲むほど唇を噛みしめ、病院をあとにした。

雲の流れが速い。天氣が、崩れるのかも知れない。

うつろな心を抱えて、ぼんやりと真冬は空を見ていた。

母と二人、ずっと互いが互いにとって唯一の支えだと信じ  
ていた。

けれど、そうではなくて。母の心には、ずっと、あの男がい  
たのだからか。

裏切られた、という気持ちはなかった。

ただ、母があつた男のことをどう思っているのか、これまで考  
えたことがなかった自分に、真冬は今更ながら茫然としてい  
た。

(あなたは一人でしか生きられないんだもの)

環の言葉が、繰り返して聞こえてくる。

私は、何を、見てきたのだろう。

とぼとぼと、真冬は家路を辿った。

そう、たとえどれだけ打ちひしがれようと、帰る場所は、

ひとりきりのあの家しかないのだ。

しかし、今日は待っている人がいた。 不幸なことに。

「……信……？」

遠目からその姿に気づき、真冬は小走りに家まで急いだ。

門の前に佇んでいるのは、間違いない。信だ。

そうだ、何を失っても、今の自分には信がいる……。

やがて、信も真冬に気づき、顔を上げた。

真冬は歩みを少し緩め、微笑みながら、ゆっくりと近づい  
ていく。

その姿を見て、だけど信は、いつものように笑ってくれなか  
った。何が嬉しいのか不思議なくらい、顔中を笑顔にする信

は、そこにはいない。ただ苦しいほど真剣な瞳で、真冬を見つ  
めていた。

真冬は徐々に落ち着かない気分になり、笑顔も消えていっ

た。

「信……？」

あと二、三步の距離まで来て、真冬は足を止めてしまっ  
た。戸惑いに眉をひそめて、信を見つめる。

すると、信のほうから真冬に近づいてきて、そつと右手を  
伸ばした。そして、真冬の長く艶やかな黒髪を、優しく梳っ  
た。

「綺麗な髪だな……」

「え……？」

「真冬の髪……すごく好きだった、俺……」

「信……？」

真冬は手を上げて、自分の髪を撫でる信の手に重ねた。信  
はそのままその手を、真冬の頬に当てる。

とても優しい仕草だけれど、やはり信の表情に、笑顔はな  
かった。

「きつい眼差しも……白い肌も……厳しいところ……優しいと  
こ……全部全部……好きだった……」

「し……ん……？ 何を……云って……」

頬に当てられた手のひらを強く握りながら、震える声で

真冬は訊いた。

信が云いたいことは、きっと、わかっていたのに。

「別れてくれ」

「……」

真冬が目が、大きく見開かれる。

信はその瞳を、じつと覗き込んでいた。

沈黙の時間が、どれだけ続いたか。

やがて空には雲が立ち込み、ぼつぼつと雨が降り始めた。

静かな雨に打たれながら、真冬は呟いた。

「……どうして……？」

「……俺は……自分が、許せない」

苦しみに表情をゆがめ、信は初めて真冬から目をそらし  
た。真冬はただ真っ直ぐ、信に視線を向けている。

「このまま……何もなかったように、俺だけ幸せになるなんて……できない……何もできないなら……せめて……俺が……俺を……罰さない」と……

「勝手なこと云ってるって……わかってる……でも……俺は……償いが……したい……」

その言葉が、真冬の心を激しく揺さぶった。償いをしたい。なんて奇麗事。

「そんなことで、何も本当に癒されはしないのに……！」

信の手を強く握ったまま、真冬は云った。涙のにじんだ瞳で、信をきつく見据える。

信は答えられず、唇を噛んだ。

「信がどれだけ自分を罰したって、失った命は返らない！ 傷ついた人の心も、癒されやしない！ そんなの……そんなの……自己満足でしかないわ……！」

「わかってる……！ そんなこと、全部、わかっている。だけど……だからって……このままじゃ……いられない……」

「信……」

「俺は……真冬みたいに……強くない……」

瞬間。世界が、暗転した。真冬は手の力を緩め、信の手を離す。そして、一歩、後ずさった。

「……なによ、それ」

感情のない、小さな小さな呟き。

その一言で、信は、自分が何を云ったのか、ようやく理解した。

「あ……真冬……」

闇より黒い瞳が、じっと信を見つめている。見知らぬ誰か

を見るように。

思わず信が伸ばした手を、真冬が振り払う。そうして、呟いた。

「わかったわ」

「真冬……」

「さよなら」

云い捨てて、真冬は門をくぐった。振り返らず、玄関を閉じる。

降りしきる雨の中、信はその場に崩れ落ちた。

その慟哭を、けれど、真冬が聞くことはなかった。

\*

玄関のドアを閉めると、真冬はそのままそこにもたれて、吐息を漏らした。

「……嘘つき」

強いだけである必要はないって、云ってくれたのに。

結局、私が強い女だと思っっているから。私は……ひとりでも平気だと、思っているから。

「……嘘つき……」

そばにいてあげたいって、云ってくれたのに。

ひとりになんかできないって、そう、云ってくれたのに。

「……うそ……つき……」

体の力が抜け、真冬はそのままずると座り込んでしまった。

涙が、あふれてくる。とめどなく。

(あなたは一人でしか生きられないんだもの)

そんなの全然嘘だった。ひとりでなんか、生きられない。

そう、だから、私は

「怖かった……の……」

ただ、信を失うことが。

彼を守りたい。そんなことを口実にして。

母の支えでありたい。そんなことを口実にして。

ただ私は、失うことが、こんなにも怖かった。

差し伸べられた手を振り払われるのが怖くて、ただいたずらに爪を立てて。

「あ……ああ……ああ……」

もっと早く気づいていれば。

いや、今これからでも、彼に本当の気持ち伝えられれば。

ただ、そばにいてほしいのだと。

だけ。

(俺は……真冬みたいに……強くない……)

あの言葉を聞いてしまった以上、真冬にはもうこのドアを開ける勇気はなかった。

今度その手を振り払われたら。これまで自分を支えてきたものが、すべて砂のように崩れてしまう。

だから、真冬は。

ただ泣き崩れるしか、できなかった。

「真冬……真冬、風邪引くわよ」

「……ん」

体を軽く揺すられて、真冬は目を覚ました。

顔を上げると、穏やかに微笑んでいる母の姿が目に入る。見舞いに来て、いつの間にか千尋のベッドにもたれて眠ってしまっていたらしい。

「大丈夫？ 受験勉強、大変なの？」

「……ん、そうでもないよ。ちょっと日差しがあったかくて、うとうとしちゃっただけ」

「そう……。大学受験だから、大変なのは当たり前だけど、体には気をつけてね」

「わかってる」

唇の端だけで、真冬はニッと笑ってみせる。

それに返してくれた母の穏やかな笑みを、真冬は眩しそうに目を細めて見つめた。

千尋が不思議そうに首を傾げる。真冬はまた小さく微笑んだ。

「お母さんが、どうしてそんな風に笑えるのか……私、ずっと不思議だった」

「真冬……？」

「でも、今なら少しわかる気がする……。お母さんは……。ほんとに大事なものを、見失ったりしなかったのよね。どんなにつらくても、苦しくても……。なくしちゃいけないものがなんなのか……。知ってたから……」

「真冬、どうしたの？ 何かあったの？」

「……ううん、なんでもない。鷹乃と待ち合わせしてるから、もう行くわね」

笑顔で、真冬は立ち上がった。

千尋は少し心配そうに眉をひそめたが、何も云わず、やは

り穏やかな笑顔を娘に向けた。

「そう。鷹乃ちゃんによろしくね」

「うん。じゃあ、また来るから」

軽く手を振って、真冬は病室を出た。

\*

十二月も半ばを過ぎた。

あの別れから、もう丸三年経ったことになる。

北風の中、歩きながら、真冬はふと苦いため息をついた。母のように、どれだけ傷ついても苦しくても、あのとき信を愛する心を信じられたなら。あんな終わり方はしなかったかも知れない。

繰り返すは何より嫌いなはずだったが、この季節になると、どうしても真冬は考えてしまう。

もし、やり直すことができるならと。

「……ってことは、そのあともまだまだ？」

「もちろんです」

「……詩音ちゃん、ほんとにそのうち、床が抜けるよ」

「え？」

うつむいて歩いていた真冬は、不意に聞こえた懐かしい声に、弾かれたように顔を上げた。路地の向こうを歩いていく、ひと組の男女がいる。

「……そんな……？」

動悸が激しくなる。驚き、喜び、戸惑い、不安、嘆き様々な感情に翻弄されながらも、真冬は即座に走り出した。

そして、そこにいたのは。彼女にとって、間違えるはずもなく。

「信……？」

「え？」

呼びかけられ、少年が振り向く。

その瞬間、真冬にとって、世界中のすべてが意味を失った。冬の景色も。道行く人々も。道路を歩き交う車も。軒先に並んだネオンも。

少年の傍らに立つ、不思議な目の色をした美しい少女も。すべてが色褪せ、ただ彼女と彼だけが、その世界に存在していた。

「やっぱり……！ やつと……逢えた……」

そして、彼女の最後の冬が始まる。

Memories Off EX  
Scenario for  
Mafuyu Fujimura  
Episode  
"The Winter"  
end



## PDF版あとがき

今更説明するまでもないですが、藤村真冬という少女は、「Can You Keep A Secret?」で私が誕生させたオリジナルキャラクターです。このとき設定としてあったのは、「信の中学時代の彼女で、彩花の事故が原因で別れた」「あの詩音を動かせるだけのインパクトのある性格」これだけでした。

ただ、こういう容貌・性格ともにキツイ子は、私のめっちゃ好みなので、執筆しながらの性格付けはかなり楽しく思いました。そのおかげか、一部で好評を博したこともあり、いつの間にか私の中のメモオフ世界に、かなり重要な位置を占めていました。

それでもほたるや鷹乃と絡ませている頃は、ほんのお遊び気分だったんですが、だんだんちゃんと「真冬の物語」が書きたいなあと思うようになりまして。PSOもそうですが、やはりオリジナルキャラクターというのは、書いていて楽しいものです。

ということで、まずすべての元となる過去編『冬物語』を始めました。

ここでいちばん困ったのが、真冬以外のキャラの扱いですね。ゲームの三年前の世界だし、ゲームでは脇役であるキャラをメインに持つてくるには、やはりそれなりの肉付けをしなければいけない。でも、ゲームが出自のキャラだと、読者にはそれぞれすでに固定されたイメージがあるわけで。通常の二次創作だと、そのイメージがコンセンサスとなつて、書きやすさにも繋がるわけですが、オリジナルキャラを主人公にしたオリジナルストーリーでは、かなり大きな足枷となりました。

結局、秋編以降はかなり開き直って、好き勝手書いてしまっていますね。信のファンの方には、認めがたい部分があるかと思えます。すべては私の未熟さ故ですので、ご容赦ください。

だから……というわけではないですが、このシリーズ、だんだんメモオフキャラは出なくなってくる……と思います。そうなると、もうメモオフ二次創作とは云えないじゃないか、ということになります。はい、その通りです(笑)。

とりあえず自分が納得できる形で、真冬の物語を続けられればいいなあと思っておりますので、自己満足な代物ですが、広いお心でおつきあいいただけると、望外の喜びでございます。

それでは、次回『冬物語 Second Season』でお会いできますように。

ご感想など、いただければ幸いです。

八神大輔

冬物語

冬物語	冬物語	冬物語	冬物語	初出
〔冬〕	〔秋〕	〔夏〕	〔春〕	
二〇〇二年二月十九日	二〇〇二年一月二十八日	二〇〇一年十二月二十日	二〇〇一年十一月十五日	